

リーマンショック後におけるグローバル金融規制強化の中で、世界の巨大銀行はビジネスモデルの見直し、資本増強、そして資産圧縮を余儀なくされた。我が国メガバンクについても例外ではなく、G-SIBs(グローバルな金融システム上重要な銀行)として一般の銀行以上に厳しい規制対応を求められてきた。しかし、投資銀行業務に軸足を置く欧米金融機関とは一線を画し、商業銀行主体のグループ経営を志向してきたことから、我が国3メガバンクは大きなビジネスモデルの変更を迫られることなく、欧米勢とは反対にグループ機能の充実に忙しい。

本報告では、グローバル金融規制の視点からの邦銀メガバンクの状況の確認と不透明要因を整理したうえで、経営上の課題と展望を行う。

まず、グローバル金融規制に関しては、バーゼルⅢとリスクアセット改革、そしてG-SIBとしてのTLAC(損失吸収能力の確保)などの状況について整理する。その上で、将来的に不透明性を残す銀行勘定の金利リスク(いわゆるIRRBB)について展望と影響を示す。

一方で課題として取り上げるのは、政策保有株式の問題、信用供給機能の低下、マイナス金利下における収益性の悪化の3点である。

政策保有株式については、我が国の金融危機後の10年間において大胆な圧縮を行ってきたが、いまだに株価により銀行財務が少なからず影響を受ける状況からは脱却できていない。この課題については解決に向けた処方箋を提示する。

二つ目の信用供給機能の低下については、メガバンク固有の問題ではなく大半の邦銀が抱える問題でもある。金融危機後の金融行政の影響もあるが、今や監督当局がこの問題を認識し、監督方針を大幅に見直した今日においても銀行がリスクの高い借り手に対する信用供給を躊躇している。この姿勢が資金需要の不足を主張する銀行と、資金調達の困難さを訴える借り手との認識のギャップをもたらしている。この点は次の三つ目の課題に通じる。

三つ目の収益性悪化の問題については、マイナス金利による預金スプレッド収益の悪化、良質な貸出先を巡る過当競争からの貸出スプレッド収益の悪化、そして海外に活路を見出したものの資源価格下落による信用リスク上昇と、外貨資産争奪戦によるスワップコスト上昇を含む外貨調達コストの上昇である。この点は、マイナス金利や外貨調達コスト上昇などの外部環境については経営努力で克服は難しいものの、二つ目の課題で取り上げた信用リスクに対する向き合い方の見直しやフィンテックなど阿新たな事業分野の開拓で回復を図らなければならない。特に、銀行法改正により銀行グループ経営にIT分野やウェブ上の商取引などあらゆる可能性を秘めている。

本報告では、以上述べたような経営課題と対応そして展望について見解を示す。